

隣国を考える

前田 康 博

一衣帯水の朝鮮半島は民族、文化、伝統あらゆる分野で日本と深い関わりを持っている。歴史的にみると、日本は秀吉の朝鮮出兵や日韓併合など癒しがたい傷を朝鮮の人人に一方的に負わせてきた。毎年八月十五日は日本にとっては、世界を敵に回して戦い、屈辱にみちた敗戦の記念日だが、朝鮮半島の人々にとっては、他のアジアの国々と同じく日本の圧制からの解放と独立を祝う日となる。

太平洋戦争後三十七年、多くの犠牲の上に平和を誓い、ひたすら働くことで国造りに励んできた日本人は、世界の人々がうらやむ経済の繁栄を達成しつつある。だが、

「加害者」であった過去の悪夢を忘れることに専念したとしても、「被害者」の立場に立つて考え、そして世界を正確に見る目を養うことができたか」と反問されると大きな疑問が残る。

十二月八日の真珠湾奇襲のあと、日系米人たちが米国で収容所に送られた事実が、米国人により告発され、戦時の非人道的行為として公聴会が米国各地で開かれていく。そこでは日系人の苦難が語られ、現在に生きる日本人は、米国は酷いことをしたものだと言及する。

だが、思考をそこで停止させてしまえば、日本人は一九四五年当時から以後、

今日までえんえんと眠り続けたことになる。

日本が無謀な戦いに突入し、米国で日系人の収容所生活が始まったとき、日本の植民地、朝鮮や、すでに戦場と化していた中国、台湾の民衆がどんな状態に追い込まれていたかを思い起こす日本人は少ない。

朝鮮各地では日本の官憲による労働者の強制連行が連日行われ、青年は志願兵や軍夫として戦場に送られ、朝鮮民族は挙げて日本の「聖戦」遂行のために駆りたてられていった。だが米国人と同じように、日本人自らが朝鮮や中国での、日本人による「非人道的行為」を告発する公聴会を開いたことはない。

炭鉱労働者として樺太に送られた朝鮮人は、今も四万人近く存在し、故郷へ帰る道をとざされている。広島、長崎で被爆した朝鮮人徴用工、兵士も数万人にのぼるが、日本国民はもとより、日本政府も国会も、これら戦争の「被害者」の救済に立ち上ろうとはしない。

戦後に育った日本人の中には、過去の不幸な歴史を学んだ上で、朝鮮半島との新し

い「関わり合い」を模索している。隣国を無視し、他民族の存在を否定した結果が、どれほど日本人自らの運命をゆがめたかを戦火の中で経験したからである。

だが平穩になれ切つて、あるいは働くことに目を奪われて、いつしか目を外へ転じることを忘れ、安逸に埋没して、暮らしてゆく日本人も多い。

筆者は七三年から数度の訪韓後、七六年から三年間、ソウル常駐特派員として、隣国の人々と暮らす機会を得た。

いかに近く、いかに親しい交際があったとしても、朝鮮はまぎれもなく、外国であり、文化や歴史、そして伝統や人々の思考、生き方はいかに日本のそれに似ていようとも、本来異質なものだった。

日本と朝鮮の距離の「近さ」に眩惑されてか、こんな当たり前の「認識」が大方の日本人の脳裏から欠落してしまふ。

「近くて遠い国」という形容は、近いが故に簡単に理解ができたと思ひ込み、他国に土足で踏み込む行為を犯しながら気付かなかった数十年前の日本人の鈍感さへの反省の言であればと思う。

しかし多くの日本人が口にするこの言葉には、往々して「何だか得体の知れない国」という先入観、偏見に満ちたものになる。

それは現在の日本人が朝鮮半島と、そこに住む人々に対し、一度も贖罪の意識を抱いたことがなく、理解しようとする謙虚な努力をしたことがないからだろう。

戦後の長い間、いかに生きるために必死であったにせよ、日本人が自らの「愚行」を反省するいとまがなかったとはいえない。

だが米国人が自ら米国の犯罪を告発する行為を目のあたりにするにつけ、日本人とは「いかなる民族なのか」と考え込んでしまふ。

大戦後、戦争の一方の当事者であった日本は、幸いにも国土の分断を免かれ、再生への道をまっしぐらに突き進むことができた。だが被害者である朝鮮民族は、南北に真つ二つに分けられて今日に至っている。

ソウル滞在中、多くの韓国人からこの現実の不当さ、不合理さを色んな言葉で聞かされた。

過去を時間の経過の中に忘却させようとつとめる理性的な人々でさえ、現実の日本と朝鮮の姿を直視すればするほど、心の高まりを抑え切れなくなる。

内省的で自己犠牲を強い人は「われわれはよくよく不運にできている」とつぶやき、加害者、日本への怨嗟の言葉をのどの奥に封じ込める。

今日の繁栄と平和を築き上げた日本人の英知と理性を信じるが故に「あえて日本人の猛省を促す」と激越な批判を投げる韓国人青年もある。

したり顔の日本人は、それらを一樣に「反日感情」ととらえ、かつての植民地だから、それぐらいの非難を受けても仕方がない——と一人合点してうなづく。かくして日本と朝鮮の人々との心の交流は依然として陽の目をみず、国家関係の表層を無味乾燥な外交用語のみが流れてゆくだけとなっている。

八一年夏、分断の一方の国、韓国は日本に対し、軍事力増強を理由にして今後五年間に政府レベル六〇億ドル、民間レベル四〇億ドル、あわせて百億ドル（一兆三千億

円余)の巨額借款を提供してほしいと申し入れてきた。

外相会談、閣僚会議、実務者会談などを通じ、両国の話し合いがもたれたが、余りにも巨額なものであり、何よりも「安全保障協力」という韓国側の主張に日本が応じ切れず、事態は紛糾した。

百億ドル借款の背景には色んな要因がある。分断国家として永年、ぼう大な軍事費のねん出が続き、国民経済を疲弊させてしまったことが第一に指摘されている。

韓国は自国の防衛に資金が必要だけでなく、日本の「平和と繁栄を守る」ための「反共防波堤」としての韓国の役割を強調している。従来の「北の脅威」に加え「ソ連の脅威」に備える安全保障費という概念を含む借款であることを日本政府に再三訴えている。

もしこの対日借款が軍事的色彩を帯びたものだとしたら、戦後の日本と朝鮮との「関わり合い」の中で一大転機となるものである。これほど明らかに軍事支援の意味を持つ経済協力が日本から外国になされたことはない。

朝鮮半島の民生安定と経済発展に、今こそ日本が手を藉す時といえるが、同時に分断国家の一方に軍事増強を促す支援は絶対すべきではないことも自明の理だろう。

それはかつて日本が植民地化し、戦後の分断に日本が第一義的な責任を有する朝鮮半島において、さらに民族の分裂状態を永久化させる行為となるからである。

日本人が対韓軍事支援よりもまず先に成されねばならないことが多く残されている。樺太在留の朝鮮人、被爆朝鮮人への尽力はいうまでもない。往来はもとより、書信の交換もできない南北朝鮮と在日の人々の境遇に、あるいは祖国の分断ゆえに間諜の汚名を着せられ、韓国の獄窓にいる在日韓国人青年、学生たちの姿に、日本人がいままで拱手傍観を続けることができるのだろうか。

朝鮮の統一を促すこと以外に、日本人の反省を世界に示す機会はない。日本自らの国益からみても、朝鮮の分断は、常に巨額の軍事借款を韓国から要請され続ける原因を残すことになる。日本の平和と安全に直結する朝鮮半島の平和と安全とは、その統

一のあとに実現するものである。

「天下之大事二対シ無頓着ナルハ決シテ取ルヘキ所ニ非ラズ……常ニ眼ヲ開キテ天下之真相ヲ監察シ志ヲ励マシ銳ヲ養ナイ胆力ヲ練リ勇氣ヲ蓄ヘ他日雄飛スルノ策ナカルベカラス……」

新島襄が明治二十二年、生徒にあてた書簡には、勉学に汲々とし、他事に関せずとする学生へのいましめが述べられているが、自国の経済繁栄にのみ汲々とし、他国を顧みずとする日本国民への痛切な言葉ととれないだろうか。

(一九三六年大阪生まれ、県立姫路東高卒。六二年、同志社大学経済学部卒、毎日新聞社入社。現在は東京本社外信部で朝鮮問題担当)

カニユーの生活と文化

織物の街リヨンと西陣――

福本武久

街なみをそれて、ふと踏み入った路地に

そのレストランはあった。店内は小じんまりとしていて、しっとりした落着きがあった。妙に取りすましたところのないのがよかった。カウンターに四、五人の先客がいた。コーヒースをすすりながら、くつろいでいた。年配のウェイトーと何ごとか快活にことばを交し、笑いが絶え間なく弾けていた。緊張し放しのぼくは、ふと心 and んだ。

「この店はほとんど常連客ばかりです」

まる二日間をさいて街案内を買って出たRさんは言った。そのレストランもぼくのためにわざわざ予約しておいてくれたのだ。店内の光景には裏町の庶民生活が滲ん

でいた。

リヨンでの三日間はあつという間だった。三時間後には空港に向わねばならぬ。ぼくの怪しげな英語に、しばしば首を傾け、それでも根気よく付き合ってくれたRさんともお別れだ。最後の食事に、気の張らないその店をえらんだ彼の心遣いがうれしかった。

あらためて店内を見渡した時、いきなりぼくに微笑みかけてくるものがあった。思わず息をのんだ。

「酔いどれのニャフロンだ」

気配を察してRさんが応えた。人形芝居“ギニョール”の登場人物ニャフロンが黒ず

んだ壁から、ぼくを見下ろしていた。

ギニョール芝居は一八世紀末、リヨンで生まれた。主要人物はギニョール、その女房マデロン、そして靴職人ニャフロンの三人。主人公ギニョールはクロア・ルースとサン・ジョルジ界限に住む絹織物の職人ニャカニユーの化身である。機織工はフランスの職人階級の代表であり庶民である。

絹織物の街リヨン、ぼくは明治五年、京都府の留学生として当地にやってきた佐倉常七、井上伊兵衛、吉田忠七の足どりを追っていた。彼らは八カ月の伝習を経て、日本の織を今日あらしめているジャカード織機とその織技を絹の街西陣にもたらしたのである。

前日ぼくはクロア・ルースから一五〇一七世紀の街並をいまでも残す旧街を、あてどもなくさまよった。

壁にぶらさがるニャフロンの真赤に腫れ上がった鼻をながめるうちに、ふいにギニョールやマデロンの姿が現われ、オールドリヨンの街並にぼくを誘い始めた。ぼくの脳裡にしかとある街景とR氏の話がオーバラップして夢現の世界にのめりこんだ。

何世紀も時代を重ねたゴシック様式の建物が狭い路の両側を埋めている。重く沈むあたりの雰囲気になんが溶け合って、その一角だけが時の流れに耐え、カニューの街の面影を育んでいる。

およそ一〇〇年前の街並に佇む多くの前に、いきなり現れたのは、古い写真でしか姿形を知らぬ佐倉、井上、吉田の三人だった。彼らの洋服姿はどこか借物めいていて胡散臭かった。くわえタバコも板につかず、異国の地で精一杯刀んでいる証としか思えなかった。

黙したまま彼らは路地裏のとあるカフェにばくを案内した。

薄暗い店内に何人もの男の影が揺れていた。三人は申し合せたように指笛を吹いた。室内は一瞬静かになった。と、板を立てかけて幕を引いた舞台の袖から、指人形が現われ唐突に芝居が始った。ギニョールがニャフロンが、そしてマデロンが現われた。語尾をことさらに引く張る発音には独特の節回しがあって、意味が解らなくても滑稽だった。指人形であるために登場人物の身のこなしはぎくしゃくしていた。その

ためにかえって人形使いの心が人形に乗り移って妙にリアリティがある。マデロンが棒をかざして、口汚なくののしりながらギニョールとニャフロンを追いつくところで幕となった。店内は笑いの渦で満ちたが、ぼくには不可解さが残った。

「どこが面白いのかね」

ふともらしたぼくの一言に、三人は鼻白み姿もろとも掻き消えた。

「ギニョール芝居の風刺や皮肉はフランス人でないと解らないでしょう」

リヨン生れのRさんの一言でふとわれに返った。登場人物の台詞には、世相が盛り込まれ、庶民の側から権力に対する批判がこめられているという。演者と観客は一体化し、芝居は相互のコミュニケーションの手段でもある。

「カニューは正直で善良な小市民です。貧乏生活のうさも女房をひっぱたくことぐらいでしか晴らせない。一八世紀の庶民生活を象徴的に語っています。彼らが好む洒落やジョークにもそういう憤懣がこめられているのです」

ギニョール芝居の真の面白さは、俗語、隠語、語呂合わせ、駄洒落、もじり、にあるとRさんは言う。借金あるパン屋を「残パン売りのオケラ野郎」酒屋を「酒屋の毒殺者」とのしり、時事問題から、政治問題まで茶化してみせる。フランス語を解せないぼくには、そのほんとうの面白さは解らない。

リヨンと同じく京都西陣もまた絹織物の街である。Rさんのギニョール芝居についての説明を聞きながら、『西陣天狗筆記』に描かれたカニューたちを想い浮かべた。

リヨンから佐倉たちがジャカード織機（ジョセフ・マリ・ジャカルが一八世紀末に発明した自動紋織機）を持ち帰るまで西陣では空引機そりひきばたが使われていた。二人織の機で、一人が上部から経糸を持ち上げ、もう一人が緯糸を通して箆で締める。四肢と眼はいそがしいが、口までは使わない。そこで本文句をもじって、掛け合いパロディをやる。

浄瑠璃『妹背山婦女庭訓』の漁師鯉七の台詞「ああ有難やと押し載き」と一人が誘うと「朝起きは、ああ明け方じやと星いた

だき」ともつ一人が受ける。『絵本太閤記』

十段目、光秀登場「心はやたけ藪垣の」は「尼神の、所は八幡やく神の」となる。『小倉百人一首』の「花の色はうつりにけりないたずらに」は「嵐山より大井川、花の色はうつりにけりな下つらに」と。冠句づけや小倉づけも得意とするところである。たとえば「横にして」という題では、「横にして立ててすすめるはしご売り」と上句を受ける。

西陣のカニニューたちもまた、このようにしてつらい長時間労働に堪えてきたのである。

「カニニューは即興詩人ですね」

ぼくは思わずつぶやいた。

油紙を貼った窓あかりだけを頼りに、美しい織物をものしたリヨンのカニニューたちと同じように、西陣のカニニューもまた天窓からのわずかな光の下で絹を織ってきた。もじりや語呂合せの上質なユーモアがギンヨール芝居の諧謔に通じるものがあるのはきびしい労働から生まれた生活文化に共通点があったからだろう。

王候貴族そして禁裡や堂上衆のきらびや

かな衣裳を調製してきたリオンと西陣のカニニューたち。単なる職人ではなく芸術家のだという誇りと自負、それゆえにきびしい世界に生き、報われることの少なかった彼らのねじくれた心境がそこにこめられていると思った。

「カニニューはアーチストです」

はからずもRさんは言った。そして「これはリオン特製なのです」としきりにブランドーをすすめた。眼を細めてグラスに注ぐRさんを一瞬ぼくはまじまじと見つめた。壁にぶらさがるニャフロンが降りてきたのではないかと思った。促されるままに一口含んだ。洗練されてはいないが奇妙な味わいがあった。

筆舌につくしがたいその芳香は、いまもリヨンの、そしてカニニューの生活の香りとして多くの舌先に残っている。

(昭和四〇年大学法学部卒業、ダイニック株式会社勤務)

同志社談叢 第二号

論文

新島襄の英文の自叙伝……………北垣宗治

新島襄と沢山保羅

―経歴の対比と二人の交流―

……………佐野安仁

同志社の近代建築(上)

―遺構と資料―……………前 久夫

資料

今泉真幸日記抄……………高橋 虔

同志社理事会決議録

―自明治三十二年七月・至明治三十七年二月―

新島襄に関する文献ノート

―著者・筆者別―……………河野仁昭

発行・同志社社史史料編集所
取扱い・同志社収益事業課

紫陽花

杉田博明

もう何年になるのか。この花を彼女が愛したのを知ったのは。きっかけは谷崎潤一郎の短篇であった。といってもわざわざ数行で、戦争も終わりに近いある日、疎開を余儀なくされた彼女が家の庭に手植えた、この花にいつまでも名残りを惜しみ、疎開先で病死する直前まで気にかけて続けたとあった。そしてその花に寄せた心情を谷崎は「いかにも彼女らしい」と追憶しているのだった。

花は毬のような花弁の淡い青が、梅雨の間断なく降りかかる雨に、いまにも溶け出しそうな紫陽花。女性に祇園新橋、大友のお多佳さんで知られた磯田多佳女である。

爽やかな表情の奥に深い陰翳を含んだ花と豊かな文才で華やかな交遊を知られた祇園の女。多佳女にとって紫陽花とは何だったのか。この花の、一体どこに魅せられたのだろうか。素朴な疑問はなぜか、胸の底を擦るようになって過ぎた。それはまた、花の季節になると、いまでも思い返されるのだ。

紫陽花や見る／＼変る爪の色

多佳女が姉の死を悼んだ句とともに、である。

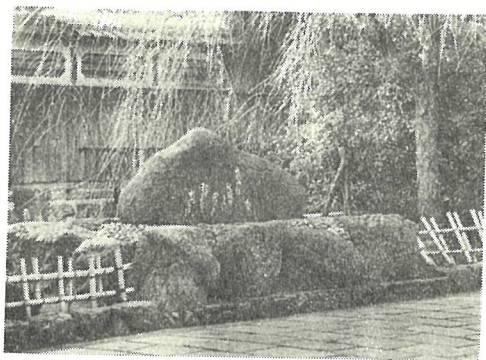
多佳女の横顔は、明治四十三年七月一日に発行された雑誌『新小説』に紹介されている。「代表的婦人」と題した企画で、豊

竹呂昇、片山春子、上村松園、平塚明子ら当代の著名女性がとりあげられた。

へ：姉は現に有名な祇園一力楼の女将さだにして幼きより読書の趣味深く、長じて校書の斑に列するに及び故紅葉子小波山人、故米遷画伯などの知遇を得て益々文芸の趣味を解するに至り、一時文芸芸者の名高かりしが、幾程もなく廢籍して陶器店九雲堂を開き、今はそれを実兄と托し、身を閑散に置き、専ら文芸の趣味にあくがれ居れり。歌は池辺義象氏に、俳句は水落露石氏に、画は故浅井忠氏に学び、歳三十二、現住は新橋縄手東

多佳が生まれたのは明治十二年。父は木間太、母はともといった。木間太は旧舞鶴田辺藩の武士。維新を前に出郷して京都縄手通に住み、手習い塾を開いた。やがて祇園の芸妓で、太棹三味線の名手で聞えたとも結婚、二女をもうけた。十歳違いのさだと多佳の姉妹である。

祇園に生まれた多くの女性がそうであったように二人は、お座敷に出た。さだは舞いを、多佳は三味線を得意とした。けれど多佳が妓籍にあったのはごくわずか。明



「大友」跡の白川筋 吉井勇の「かにかくに祇園は恋し……」の碑が立っている。

治三十七年ごろから突然、お座敷に出なくなる。男性との別れがあったのか。ちなみに当時を振りかえると、大友近くの、同じ新橋のお茶屋加藤楼の加藤ユキが四万円の落籍料で話題をまき、モルガンと結婚。夷谷座で「一夜夢四万円」が上演され、朝日新聞に「外人の失恋」が連載されるといふこの一大事件は終止符を打った。佐藤陵星の論文「諸姉に告ぐ」が日出新聞を飾ったものこのころ。浅井忠が「現今の日本の社

会はどうやなものはなきと存候」と中央画壇の派閥争いを避け、「陶器でもいじくって遊ばんがため」に京都に移ったのは明治三十五年秋だった。この浅井忠とはのちに二人で陶器店を開いている。

多佳の、突然の引退は、彼女の内部にある変化をもたらしたのは想像にかたくない。

祇園に生まれ、祇園に息遣いを重ねて生きた多佳は長い歴史を持つ、この町の華やかな相貌の底に渦巻く赤裸々な人間の生きざまを知り過ぎるほどであった。あどけない表情を分厚い白粉で包み隠して宴席にはべり、客が交わす暗号のような会話や淫猥な嬌声に精一杯の聞き耳を立てて頭を回らす舞妓。屋形との板挟みに身を絞りながら一途で純な愛を捨てて、なによりも祇園の女として生きなければならなかった芸妓たち。彼女たちは古い町がかたくなに守り育ててきた仕来を自からの衣裳の下に重たく鎧のようにまとって生きた。自己抑制を強いながら仕来との間隙に起こる葛藤に身を揉む女たちを目にするにつけても多佳は、かつてこの町に権力におもねず自信と誇り

を持って生きた女のいたことを思うのだった。彼女もまぎれなく祇園の女にほかならなかった。かねてから憧憬した彼女の文芸への趣味は引退を機に、ますます強まっていくのだ。

多佳の、文芸への傾斜を谷崎はこう書いている。「いわゆる文学芸者といった風な型の女でなかったのは勿論であった。それと云うのが多佳女の文学上のたしなみは、昔の遊女が和歌俳諧の道を心得てゐた、あの伝統を引くもので、祇園の梶とか百合とか云ふやうな女の跡を継ぐものであるから、文芸好きと云っても純然たる旧派に属するのであって、京都の花街には古くからある型の一つなのである」と。いや、彼女にとって文芸こそは、自らが主体的にこの町で生きようとした証しではなかったか。そしてそれは自からの生と同時に、京おんなを自分に課して生きようとしたように思えてならない。

彼女が文芸に過したののは、大友の、白川につき出した三疊の居間であった。吉井勇が有名な「かにかくに 祇園は恋し……」の歌を詠んだ部屋である。とくに調度に凝

るわけでもなかったけれど、しつらえを自分で配慮し、小さな庭に、紫陽花を植えた。この居間は多佳にとって心を解放できる唯一の場所であった。慣れた文机の前に横座りすると、好きな句歌と絵に心を一つにすることができた。

「一日の営みを終えて自分の部屋と決まっている三畳に這入り、床下を流れるせせらぎの音を聞きながら枕につくと、その勞がきれいに洗い去られる」(日記から)

雨の日は居間が紗で周りを覆い包まれたように孤立し、じっと息をひそめればたちまち足もとから時空が消えた。そんな孤独に身をまかせ、わずかの無意の気分をいつまでも味わった。現実について引き戻されるかといった緊張を背に感じながら。庭の紫陽花は、いつもと変わりない冷淡な表情で、しかも揺ぎない自信で雨にうたれて咲いた。

彼女はその姿に自分を映し、ある京おんなの生きざまの典型を見ていたのであるう。

(昭和三十三年法学部卒業・京都新聞社記者)

同志社校地出土の埋蔵文化財

鈴木 重治



美濃天目碗 (江戸時代前期)

(同志社中学校日新館地点の江戸時代の井戸 SE 1026 より出土。口径 11.5 センチ、高 5.7 センチ、底径 4.5 センチ)

多くの茶人に親しまれている茶碗の中にも、天目碗ほど広く受け入れられているものはすくない。絵画の中での水墨画のように、東洋の心を具現している代表的なやきものであると指摘するむきもある。無駄のない形態と、単的な黒色の釉に秘められている洗練された心を評価するからである。天目の名称については、中国福建省の建

盞の釉に、斑点のあるものを星建盞といふ、星のあることによつて、天目と云うとするのは妥当ではない。鎌倉時代に中国に渡つた禅僧たちが、天目山からも帰つた建盞を、天目とよんだことが語源となつてゐる。天目碗は、もともと建盞を意味した

ものだが、いまでは黒い釉薬のかかったやきものはすべて天目と呼んでいる。

中国の出土例からすると、安徽省屯溪市の西周時代の墳墓から出土した黒釉色の釉調をもつ碗が、青銅器とともに発見されていて、黒色の釉薬の古さを示している。

日本で最初に天目碗を焼造したのは、瀬戸であり、建盞を手本として大量に生産したことは、各地の出土品や伝世品からみても明らかである。室町時代から安土・桃山時代の寺院址や集落遺跡、城館などからの出土資料をみると、茶臼や茶入などを伴つて出土する例がある。

京都での出土例のうち、安土・桃山時代から江戸時代の前半にかけての天目碗は、美濃産の天目碗が主体を占めていて、唐津などの資料はすくない。織部や志野の陶片とともに出土する天目碗のうち、井戸や石組みの貯蔵庫から出土する資料の中に優品がある。

同志社の校地から発掘調査によつて出土した天目碗は、江戸時代の公家屋敷にかかわる遺構からの検出例が多い。宝永五年(一七〇八)の京都大火の際に罹災して放棄されたものである。

当資料は、釉調をはじめ露胎部や高台の削りに美濃天目の特徴をよくそなえていて、江戸時代前期の代表例といえよう。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任